

神と語って夢ならぬ

松本 侑子 著

島根県の隠岐は日本海に浮かぶ孤島である。後鳥羽上皇、後醍醐天皇、小野篁らを始め古来より多くの人が隠岐に流されたため「流人の島」と呼ばれてきた。本書は、島根県出雲市出身の松本侑子さんが幕末から明治にいたる隠岐を舞台に書いた歴史小説だ。

江戸時代の隠岐は北前船がさかんに出入りし賑わっていた。幕末には黒船も現れ、島民を不安にさせた。松平直政が松江藩主になったあと隠岐は松江藩の



隠岐騒動の熱気を今に甦らせた

評 人 平田 俊子

間や師である隠岐出身の儒者中沼了三、隠岐に流罪となった「大塩平八郎の乱」の首謀者の息子など多彩な人物が登場し、時代と戦う。激動の時代の熱気や若者たちの義憤が生き生きと描かれているが、とりわけ整介が魅力的で、このような人物が隠岐にいたのかと思うと隠岐生まれの私は誇らしい気がする。

いつの時代も若者は理想に燃え、老獺な輩の前に敗北する。整介たちの奮闘も無念な結果に終わる。

「歴史は、生き残った勝者が作る。勝者の名とその正義だけが、後世に伝わる。斃れた者の思いは、歳月の流れに沈み、やがて忘れ去られていく」。歳月を経て老いた整介が達した心境は、いつの時代、どこの国にも共通するものだろう。百四十年以上も昔のクーデターなど隠岐に住む人でさえほとんど忘れていく。著者は世界初の自治政府誕生の経緯に果敢に取り組み、整介たちの熱い魂を今の時代に甦らせた。

(光文社 1890円)



開国派と尊攘派に別れて世の中が大きく動くと隠岐にも荒波が立つ。松江藩の圧政にたまりかねた農民三千人が蜂起して、藩の役人を島から追放し隠岐を自治政府とした。これが隠岐騒動である。

小説の主人公は隠岐騒動の中心人物の一人である井上整介だ。整介は庄屋の息子として生まれ、漢学、剣術、漢方を学んだ熱血漢だ。志を同じくする仲

まつもと・ゆづこ 1963

年生まれ。筑波大学卒。作家、翻訳家。『恋の蝨 山崎富栄と太宰治』で新田次郎文学賞を受賞。